

繁殖農家グループが 哺育センターを設立 集中管理で子牛を育てる

和牛繁殖農家において、経営を安定させるためには子牛を健康に育てることが大切である。今回は、地域の繁殖農家グループが哺育センターを設立し、子牛の集中管理による省力化へ取り組み、健康な牛を育てている事例を紹介する。

ストレスなく育てるために 対策は万全に

この哺育センターは平成17年11月に地域の繁殖農家8軒が共同で設立した。

それまでは各農家で子牛の哺育・育成を行っていたが、農家ごとに管理がさまざまであり、子牛の疾病対策や繁殖もうまくいかないこともあった。このような経緯から同センターを設立。以後、これまでの経験を活かしながら哺育牛の優れた飼養管理技術を築き上げてきた。

■導入時は特に注意

農家からセンターに導入する牛は生後1週間から10日。導入時は体重測定と消毒を実施する。設立当初は、導入直後から哺乳機で管理していたが、下痢を起こすなど発育がよいくない牛が見られたため、急速ハッチをつくり、1週間はハッチで飼育ことにした。これにより、移動や集団哺育によるストレスを緩和できた。

■寒さ対策をしっかりと

この地域の冬は氷点下になることも多く、寒さに弱い牛はカーフジャケットを着せる、敷料を1週間に

一度交換して厚く敷く、ヒーターをつけるなどの対策が重要になる。ハッチ内を保温するため上部を板で覆う、壁はダンボールと気泡緩衝材で熱を閉じこめる。さらに、寒さに弱い牛は手製のコタツヒーターで暖める。一方、アンモニアなどが充満しないよう*ダクト換気により常に送風をしている。

■代用乳は徐々に増やして減らす

代用乳の給与マニュアルを基に、個体ごとに量を調整して徐々に増加させる。離乳ストレスをなくすため、徐々に給与量を減らし、離乳後も自動哺乳機からお湯を給与する。

■やさしく、牛の気持ちになって

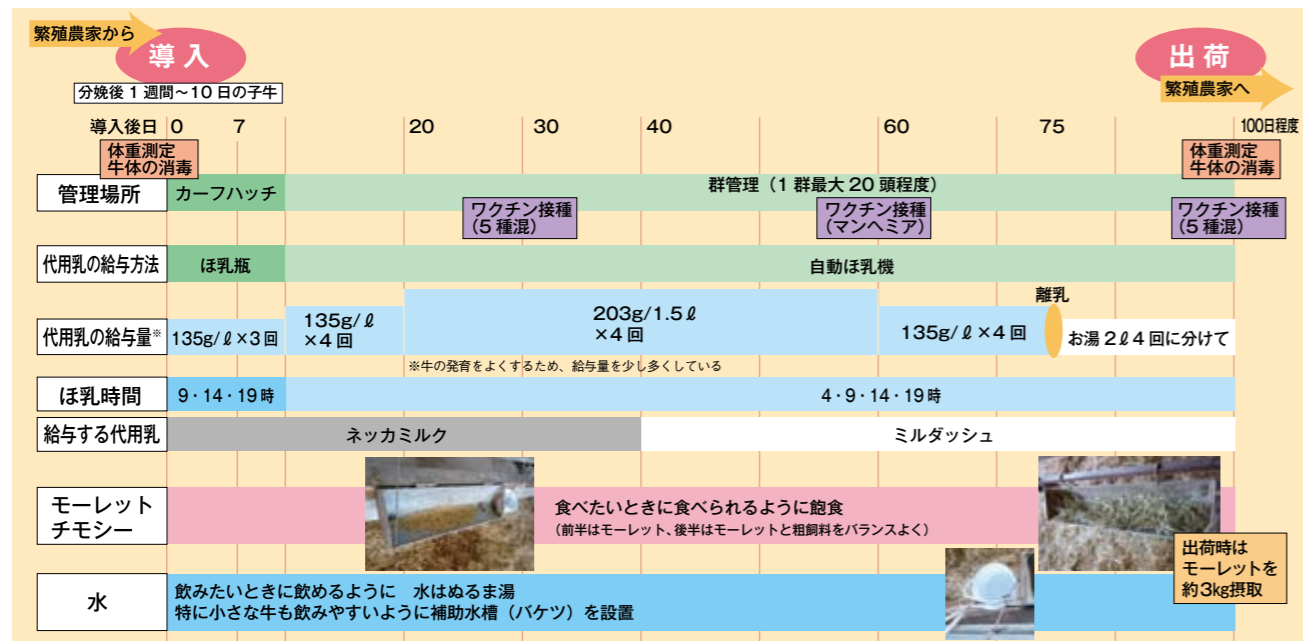
毎朝、子牛の名前を呼びながら牛舎に入り、安心感を与える。毎日、自動哺乳機に示される飲んだ量と飲

むスピードを確認し、少しでも異変があればすぐに体温測定をする。

哺育から育成までを センターで一貫して行う

同センターで育った子牛は600頭を超えた。子牛の出荷時の体重は日齢以上(120日齢ならば120kg以上)を目標とし、モーレット(人工乳)も3kg以上摂取している。最近では人工乳が改良され、さらに食いつきもよくなった。この1年間の斃死頭数はわずか4頭、斃死率は2.2%。良好な成績を維持できるのも、日頃の管理によるものだ。今後は、グループでばらつきのない素牛を出荷することが目標。そのためには、哺育までではなく、素牛の育成までこのセンターで行いたいという。

哺育センターの主な飼養管理体系



寒さ対策



表：哺育センターの成績 平成20年4月～平成21年3月

性別	導入頭数	出荷頭数	斃死率(%)	導入		出荷		発育基準値*2 120日齢時点での体重(kg)	増体重(kg)	日増体重(kg/日)
				体重(kg)	日齢(日)	体重(kg)	日齢(日)			
去勢	107	105	1.9	41.4	9	124.0	112.0	111.8~153.7	82.6	0.80
雌	76	74	2.6	38.5	9	115.1	115.0	90.7~136.0	76.6	0.72
合計	183	179	2.2	40.0	9	119.5	113.5	-	79.6	0.76
			3~4*1							

Point!

この地域の斃死率は3~4%。このセンターは2.2%と低い

Point!

発育は標準発育の範囲内であり、順調な発育をしていることがうかがえる

*1 この地域における斃死率
*2 日本飼養標準 肉用牛(2008年版より)